

幼稚園・保育所における自然体験活動の実施実態

井上美智子 無藤 隆*

キーワード：幼稚園、保育所、自然体験活動

1. はじめに

現代の子どもに具体的な自然体験や生活体験が欠けることはよく指摘される。現行『幼稚園教育要領』の改訂（1998）に先だつ「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方に関する調査研究協力者会議報告」（1997）においても“幼児期において自然のもつ意味は、非常に大きい”と確認され、“幼児が室内での一人遊びに追いやられる傾向が増大し、戸外で自然と触れ合い思いっきり遊ぶ姿が減ってきて”いるとして、幼稚園では“園外での活動を充実させるとともに、園庭に花壇や畑を設けたり、生き物の成長をともに体験するなど、身近に自然を体験する機会が幼稚園の生活の中に豊富に用意されていることも必要”とされた。その結果、現行『幼稚園教育要領』では、自然とのかかわりは従来のように特定の領域にかかわるものではなく、あらゆる領域にかかわって子どもの総合的な発達に寄与するものにとらえ直されたのである。さらに、中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」（2005）でも、現代の子どもは“室内の遊びが増えるなど、偏った体験を余儀なくされている”としており、次回改訂においても幼稚園教育における自然との関わりの

評価には変更がないと考えられる。これは教育内容の側面で整合性が図られている保育所保育においても同様で、保育の場における自然体験活動が現代の子どもの発達にとって重要なものにとらえられていることは確かである。

それでは、現行制度下の保育現場において自然を体験する機会は豊富に用意されているのだろうか。自然とのかかわる活動の個々の実践報告は多いが、一定地域の保育現場における自然体験活動の実施実態を調査した研究は少なく、前要領下での調査である田尻（1990）や遠藤・金崎（1999）、井上（2002）、現行要領下における小谷ほか（2000）と田尻・無藤（2005）らの報告がある程度である。これらの報告から、保育の場における自然体験活動は飼育栽培・園庭の自然要素を使つての遊び・散歩が中心であること、散歩は幼稚園よりも保育所の実施頻度が高いことなどが明らかになっている。すなわち、これらの調査では従来実施されてきた飼育栽培や園外保育等の活動をもって自然とのかかわる活動とみなされている。しかし、現代の子どもにとっての自然とのかかわる意義を考えた場合に、従来型の内容だけでは不十分である（井上・無藤 2003；井上 2006）。例えば、自然地への散歩や園外保育であっても、既設遊具で遊んだり伝承遊びをしたりするのと、多様な自然要素と五感を使って遊ぶのとでは経験内容が異なる。園庭での飼育栽培も動植物の存在が視野に入っているという程度のかかわりもあれば、あらゆる

*白梅学園大学 教授

る過程にかかわり収穫物を食べたり飼育動物に与えたりするなど意図的に生活と結びつけるかかわりもある。したがって、より詳細な質問項目を設定して、その実態を明らかにする必要がある。また、保育の場の違いとしては幼稚園・保育所だけでなく、公立・私立という違いも重要であろう。しかし、今までにこの観点から分析された調査もない。そこで、本稿では、これらの違いも含めて自然体験活動の実態をより詳細な質問項目の設定によって明らかにし、今後の課題を検討することにした。

2. 方法

郵送による質問紙調査を2004年3月に実施した。調査対象は、東京都及び兵庫県（以下、「都県」と表記）の公立・私立（以下、「公私」と表記）の幼稚園及び保育所（以下、「幼保」と表記）で、都県別・公私別・幼保別の8カテゴリーに分け、乱数表を用い各カテゴリーから200園を抽出

した。抽出元は、幼稚園は『全国学校総覧』、保育所は『全国保育所名簿』である。閉園等の理由で返送されたものもあり、有効送付数は各カテゴリーとも200園を下回った。なお、保育所は個々に保育所・保育園・愛児園等の名称が使用されていたが、ここでは保育所という表現に統一した。有効送付数・回収数・回収率は表1の通りで、総回収数は427園（回収率27.3%）であった。質問は2003年度の年長児クラス対象の自然体験活動全般にわたるものを8項目群に分けて設定した。そのうちの1項目群が子どもの活動に関する質問23項目で（質問内容は結果に示した）、本稿ではその結果を報告する。回答者の職務は、園長・所長が31.9%、主任20.9%、担任31.6%であった。

3. 結果

質問〈1〉～〈23〉の23項目について都県（2）×幼保（2）×公私（2）の3元配置の分散分析を行い、表2に質問項目ごとに7段階の回答項目を点数化したカテゴリー別の平均値を、表3に分散分析のカテゴリー間比較の結果を示した。ここでは、点数化した平均値によって頻度の高低を判断した。

まず、保育室での活動だが、“〈1〉保育室で、体験した自然を題材に表現遊びをする”頻度は、兵庫県が東京都よりも多く、都県の主効果が有意であった。そして、公私×幼保の組み合わせで相互作用が見られた。“〈2〉保育室で、自然を主題にしたお話を聞いたり、絵本を見たり、読んだりする”頻度は、〈1〉の頻度より高い傾向にあり、ここでも兵庫県の頻度が高く、都県の主効果が有意であった。また、都県×公私、公私×幼保の組み合わせで相互作用がみられた。“〈3〉保育室で、自然のもの（動植物や石・砂などの自然物）を室外から持ち帰って、利用して遊ぶ”頻度は東京都よりは兵庫県が、私立よりは公立が、保育所

表1 回収園数と回収率

都県	幼保	公私	有効送付数	回収数	回収率(%)
東京都	保育所	公立	193	30	15.5
		私立	198	49	24.7
	幼稚園	公立	192	63	32.8
		私立	199	43	21.6
兵庫県	保育所	公立	192	61	31.8
		私立	198	61	30.8
	幼稚園	公立	194	62	32.0
		私立	198	58	29.3
合計	保育所	公立	385	91	23.6
		私立	396	110	27.8
	幼稚園	公立	386	125	32.4
		私立	397	101	25.4
総計			1564	427	27.3

表2 自然体験活動の実施頻度（各カテゴリーごとの平均値）

質 問 項 目	東京都				兵庫県			
	幼稚園		保育所		幼稚園		保育所	
	公立	私立	公立	私立	公立	私立	公立	私立
<1> 保育室で、体験した自然を題材に表現遊びをする。	3.52	2.87	3.00	3.38	4.39	4.00	3.81	3.75
<2> 保育室で、自然を主題にしたお話を聞いたり、絵本を見たり、読んだりする。	4.98	4.36	4.52	5.04	5.57	5.02	5.18	5.16
<3> 保育室で、自然のもの（動植物や石・砂などの自然物）を室外から持ち帰って、利用して遊ぶ。	4.49	3.90	4.14	4.26	5.30	4.41	4.66	4.28
<4> 園庭の自然のもの（動植物や石・砂などの自然物）を使って、その場で遊ぶ。	5.95	5.48	5.93	5.40	6.21	5.52	6.17	5.48
<5> 園内で飼育栽培している動植物の世話をしたり、観察する。	6.94	4.82	6.39	6.07	6.85	6.30	6.46	6.14
<6> ドングリなど野外の植物の実を持ち帰り、栽培する。	2.59	2.11	1.71	2.35	2.83	2.46	2.40	2.25
<7> オタマジャクシなど野外でとってきた小動物を持ち帰り、飼育する。	3.21	2.43	2.79	3.20	3.83	3.05	3.69	3.09
<8> 園内で栽培している野菜や木の実を食べたり、飼育動物のえさにする。	4.40	2.74	3.69	3.64	4.00	3.33	3.73	3.50
<9> 園内で生ゴミや落ち葉、雑草などを利用して堆肥や腐葉土をつくり、栽培に利用する。	1.92	1.71	1.76	1.80	2.33	1.63	2.03	1.98
<10> 園外の自然に囲まれたところで、鬼ごっこなどの身体を動かす伝承遊びをする。	4.21	3.57	5.17	5.13	4.18	3.75	4.42	4.19
<11> 園外の自然に囲まれたところで、ボールなどの道具を使った運動遊びをする。	2.79	2.85	3.60	4.41	3.28	3.20	3.38	3.70
<12> 園外の自然に囲まれたところで、滑り台やアスレチックなどの固定遊具を使って遊ぶ。	3.10	2.37	4.80	4.87	3.38	3.50	3.72	3.85
<13> 園外の自然に囲まれたところで、山登りやスキー、水泳など目的の明確な活動をする。	1.15	1.24	1.50	1.76	1.68	1.91	1.67	2.05
<14> 園外の自然に囲まれたところで、レクリエーションゲームやキャンプファイヤーなどをする。	1.65	1.59	1.41	1.58	1.49	1.81	1.36	1.70
<15> 園外の自然に囲まれたところで、自然のもの（動植物や自然物）を観察したり、採集する。	3.18	2.57	3.86	3.64	3.19	3.16	3.68	3.49
<16> 園外の自然に囲まれたところで、自然のもの（動植物や自然物）を使って、その場で遊ぶ。	3.08	2.52	4.21	3.74	3.19	3.10	3.61	3.50
<17> 園外の自然に囲まれたところで、自然のもの（動植物や自然物）を使って、その場で表現遊びをする。	1.87	1.57	2.50	2.03	1.95	2.00	2.29	2.29
<18> 園外の自然に囲まれたところで、一定範囲内を自由に歩いたり、見たり、好きなことをしてゆったりと遊ぶ。	3.34	2.69	4.63	4.19	3.37	3.17	4.14	3.90
<19> 園外の自然に囲まれたところで、自然を主題にしたお話を聞いたり、絵本を見たり、読んだりする。	1.60	1.73	1.79	1.93	1.98	2.02	2.26	2.39
<20> 園外の自然に囲まれたところで、飯ごう炊さんやお菓子づくりなど調理をしてその場で食べる。	1.05	1.07	1.03	1.26	1.19	1.28	1.09	1.42
<21> 田んぼや畑で作業をしたり、収穫したりしながら、その場でゆったりと遊ぶ。	1.82	1.43	1.89	1.93	2.32	2.19	2.15	2.07
<22> ネイチャーゲームなどの自然（動植物や自然物、自然の事象）と五感で触れあうゲームをする。	1.84	1.29	1.41	1.45	1.56	1.57	1.45	1.76
<23> 自然との触れあいが目的のプログラム（例：自然体験の専門家が提供するものやムッレ教室など）をする。	1.30	1.26	1.10	1.20	1.19	1.24	1.18	1.29

※回答は、「したことはない」・「年に1回程度」・「学期に1回程度」・「学期に数回」・「月に数回」・「週に数回」・「毎日」の7段階評定とした。低頻度（1）～高頻度（7）をそのまま得点化し、平均値（最低値1～最大値7）を出した。数値が大きいほど高頻度である。

表3 自然体験活動の実施頻度（全体の平均値）と分散分析の結果

質問項目	平均値 (全体)	分散分析で有意な結果がみられたもの (F 値)			
		都県	幼保	公私	相互作用
<1> 保育室で、体験した自然を題材に表現遊びをする。	3.67	兵庫>東京 (F=28.42)**			公私×幼保 (F=5.21)*
<2> 保育室で、自然を主題にしたお話を聞いたり、絵本を見たり、読んだりする。	5.07	兵庫>東京 (F=21.52)**			都県×公私 (F=3.89)* 公私×幼保 (F=13.84)**
<3> 保育室で、自然のもの（動植物や石・砂などの自然物）を室外から持ち帰って、利用して遊ぶ。	4.55	兵庫>東京 (F=7.31)*	幼>保 (F=4.86)*	公立>私立 (F=16.48)**	公私×幼保 (F=9.25)*
<4> 園庭の自然のもの（動植物や石・砂などの自然物）を使って、その場で遊ぶ。	5.78			公立>私立 (F=16.59)**	
<5> 園内で飼育栽培している動植物の世話をしたり、観察する。	6.19			公立>私立 (F=58.05)**	公私×幼保 (F=16.80)** 都県×公私×幼保 (F=5.53)*
<6> ドングリなど野外の植物の実を持ち帰り、栽培する。	2.40				
<7> オタマジャクシなど野外でとってきた小動物を持ち帰り、飼育する。	3.22	兵庫>東京 (F=8.03)**		公立>私立 (F=5.98)*	
<8> 園内で栽培している野菜や木の実を食べたり、飼育動物のえさにする。	3.66			公立>私立 (F=16.58)**	公私×幼保 (F=10.48)**
<9> 園内で生ゴミや落ち葉、雑草などを利用して堆肥や腐葉土をつくり、栽培に利用する。	1.93				
<10> 園外の自然に囲まれたところで、鬼ごっこなどの身体を動かす伝承遊びをする。	4.28	東京>兵庫 (F=7.05)*	保>幼 (F=29.89)**		都県×幼保 (F=9.99)*
<11> 園外の自然に囲まれたところで、ボールなどの道具を使った運動遊びをする。	3.38		保>幼 (F=14.25)**		
<12> 園外の自然に囲まれたところで、滑り台やアスレチックなどの固定遊具を使って遊ぶ。	3.64		保>幼 (F=51.29)**		都県×幼保 (F=26.56)**
<13> 園外の自然に囲まれたところで、山登りやスキー、水泳など目的の明確な活動をする。	1.63	兵庫>東京 (F=16.88)**			
<14> 園外の自然に囲まれたところで、レクリエーションゲームやキャンプファイヤーなどをする。	1.58				
<15> 園外の自然に囲まれたところで、自然のもの（動植物や自然物）を観察したり、採集する。	3.33		保>幼 (F=24.19)**		
<16> 園外の自然に囲まれたところで、自然のもの（動植物や自然物）を使って、その場で遊ぶ。	3.33		保>幼 (F=35.33)**		都県×幼保 (F=8.12)*
<17> 園外の自然に囲まれたところで、自然のもの（動植物や自然物）を使って、その場で表現遊びをする。	2.10		保>幼 (F=13.16)**		
<18> 園外の自然に囲まれたところで、一定範囲内を自由に歩いたり、見たり、好きなことをしてゆったりと遊ぶ。	3.63		保>幼 (F=65.70)**	公立>私立 (F=8.47)*	
<19> 園外の自然に囲まれたところで、自然を主題にしたお話を聞いたり、絵本を見たり、読んだりする。	1.98	兵庫>東京 (F=7.39)*			
<20> 園外の自然に囲まれたところで、飯ごう炊さんやお菓子づくりなど調理をしてその場で食べる。	1.18	兵庫>東京 (F=8.96)*		私立>公立 (F=12.92)**	
<21> 田んぼや畑で作業をしたり、収穫したりしながら、その場でゆったりと遊ぶ。	2.00	兵庫>東京 (F=12.31)**			
<22> ネイチャーゲームなどの自然（動植物や自然物、自然の事象）と五感で触れあうゲームをする。	1.59				
<23> 自然との触れあいが目的のプログラム（例：自然体験の専門家が提供するものやムッレ教室など）をする。	1.23				

※平均値は都県・幼保・公私の8カテゴリーの平均値である。
 ※P<0.05の場合に「*」、P<0.01の場合に「**」を記した。

よりは幼稚園で有意に高く、公私×幼保の組み合わせで相互作用がみられた。

次に、園庭での活動である。“<4> 園庭の自然のもの（動植物や石・砂などの自然物）を使って、その場で遊ぶ”頻度は高かったが、都県や幼保による差はなく、私立より公立の方が高頻度であった。“<5> 園内で飼育栽培している動植物の世話をしたり、観察する”頻度は23項目中最も高かったが、ここでも私立よりも公立が高頻度であった。また、公私×幼保及び都県×公私×幼保の組み合わせで相互作用がみられた。“<6> ドングリなど野外の植物の実を持ち帰り、栽培する”頻度は低く、有意差も相互作用もなかった。“<7> オタマジャクシなど野外でとってきた小動物を持ち帰り、飼育する”頻度は、東京都よりは兵庫県が、私立よりは公立での実践頻度が高かった。“<8> 園内で栽培している野菜や木の実を食べたり、飼育動物のえさにする”頻度は、私立よりは公立での実践頻度が高く、公私の主効果が有意で、公私×幼保の組み合わせで相互作用がみられた。“<9> 園内で生ゴミや落ち葉、雑草などを利用して堆肥や腐葉土をつくり、栽培に利用する”活動は実践頻度が低く、カテゴリー間で差はなく、相互作用もなかった。

そして、園外の自然地における活動である。“<10> 園外の自然に囲まれたところで、鬼ごっこなどの身体を動かす伝承遊びをする”頻度は、園外の自然地における活動で最も実施頻度が高かった。唯一、兵庫県よりも東京都での実施頻度が有意に高い項目であり、また、幼稚園よりも保育所で高かった。都県と幼保の主効果が有意で、都県×幼保の組み合わせで相互作用がみられた。“<11> 園外の自然に囲まれたところで、ボールなどの道具を使った運動遊びをする”頻度も幼稚園より保育所で有意に高かった。“<12> 園外の自然に囲まれたところで、滑り台やアスレチックなどの固定遊具を使って遊ぶ”頻度も幼稚園より保育

所で高かったが、都県×幼保の組み合わせで相互作用がみられた。同じく自然地での活動の中で、“<13> 園外の自然に囲まれたところで、山登りやスキー、水泳など目的の明確な活動をする”頻度はいずれのカテゴリーでも低かったが、兵庫県が東京都よりよく実施していた。“<14> 園外の自然に囲まれたところで、レクリエーションゲームやキャンプファイヤーなどをする”頻度も低く、カテゴリー間の差や相互作用はなかった。“<15> 園外の自然に囲まれたところで、自然のもの（動植物や自然物）を観察したり、採集する”、“<16> 園外の自然に囲まれたところで、自然のもの（動植物や自然物）を使って、その場で遊ぶ”、“<17> 園外の自然に囲まれたところで、自然のもの（動植物や自然物）を使って、その場で表現遊びをする”、“<18> 園外の自然に囲まれたところで、一定範囲内を自由に歩いたり、見たり、好きなことをしてゆったりと遊ぶ”の4項目の実施頻度はいずれも幼稚園より保育所で高かった。うち、<16> は都県×幼保の組み合わせで相互作用があり、<18> は私立よりも公立の実施頻度が高かった。“<19> 園外の自然に囲まれたところで、自然を主題にしたお話を聞いたり、絵本を見たり、読んだりする”、“<20> 園外の自然に囲まれたところで、飯ごう炊さんやお菓子づくりなど調理をしてその場で食べる”、“<21> 田んぼや畑で作業をしたり、収穫したりしながら、その場でゆったりと遊ぶ”の3項目はいずれも実施頻度は低かったが、東京都より兵庫県がよく実践していた。うち、<20> のみ、公立より私立の実践頻度が高かった。“<22> ネイチャーゲームなどの自然（動植物や自然物、自然の事象）と五感で触れあうゲームをする”と“<23> 自然との触れあいが目的のプログラム（例：自然体験の専門家が提供するものやムッレ教室など）をする”活動はほとんど実践されず、カテゴリー間で有意な差はなく、相互作用もなかった。

4. 考察

23項目のうち、平均値5.0以上の高頻度で実践されていたのは“<2> 保育室で、自然を主題にしたお話を聞いたり、絵本を見たり、読んだりする”、“<4> 園庭の自然のもの（動植物や石・砂などの自然物）を使って、その場で遊ぶ”、“<5> 園内で飼育栽培している動植物の世話をしたり、観察する”の3項目であった。絵本などの文化財とのかかわりは自然との触れ合いとはいいがたく、飼育栽培も自然とかかわる活動として大正期から取り入れられてきた伝統的な保育内容である（井上2000）。先行研究においても土・水とかかわる活動やままごと、飼育栽培活動は高頻度で実践されていると報告されており（小谷ほか2001；田尻・無藤2005）、その結果と一致する。園庭の自然環境の質は園によって格差があるものの（井上・無藤2006）、土・水・花など身近な自然要素はそれなりに存在するため子どもが園庭において日常的に身近な自然とかかわって遊ぶ機会は与えられていると評価できる。

しかし、平均値が2.0以下の低頻度の項目をみると、農とかかわる項目としての“<9> 園内で生ゴミや落ち葉、雑草などを利用して堆肥や腐葉土をつくり、栽培に利用する”や“<21> 田んぼや畑で作業をしたり、収穫したりしながら、その場でゆったりと遊ぶ”、生活経験を自然地にも持ち込む項目としての“<19> 園外の自然に囲まれたところで、自然を主題にしたお話を聞いたり、絵本を見たり、読んだりする”や“<20> 園外の自然に囲まれたところで、飯ごう炊さんやお菓子づくりなど調理をしてその場で食べる”などで、自然と生活の間の障壁を減らすような項目はあまり意識されていない。また、目的が明確なプログラム化された活動といえる“<13> 園外の自然に囲まれたところで、山登りやスキー、水泳など目的

の明確な活動をする”や“<14> 園外の自然に囲まれたところで、レクリエーションゲームやキャンプファイヤーなどをする”、“<22> ネイチャーゲームなどの自然（動植物や自然物、自然の事象）と五感で触れあうゲームをする”、“<23> 自然との触れあいが目的のプログラム（例：自然体験の専門家が提供するものやムツレ教室など）をする”などの実施頻度も低かったが、子どもが主体的に選んだ遊びを評価する保育の場では、こうした活動は保育者が抵抗を感じ、敬遠されるのかもしれない。

都県による差は、23項目中9項目にみられ、うち8項目で兵庫県が東京都より高頻度で実施していたが、兵庫県では保育者がより積極的に多様な活動を取りいれていると考えられる。兵庫県は1988年度から全公立小学校5年生対象に5泊6日の“自然学校”行事を導入したり、2006年度には『兵庫県環境学習環境教育基本方針』を策定するなど、環境学習を熱心に推進している自治体である。したがって、そうした地域的な背景の違い・保育者集団の考え方の違いもありえるが、兵庫県には活動を取りいれやすい自然地も比較的豊かにある。林野庁によると2002年度の兵庫県の森林率が67%に対し東京都は36%¹⁾、2004年度の兵庫県の耕地面積が9.4%²⁾に対し東京都は3.8%³⁾と、東京都の自然地の面積は兵庫県に比べて少なく、自然環境の量的な違いが身近な自然利用に影響する可能性は高いと考えられる。こうした自然体験活動の内容の地域差は田尻・無藤(2005)でも報告されている。

幼稚園・保育所の差があった項目は、“<3> 保育室で、自然のもの（動植物や石・砂などの自然物）を室外から持ち帰って、利用して遊ぶ”という項目以外はすべて園外の自然地での活動で、保育所が幼稚園よりも実践頻度が高く、先行研究の結果と一致した（遠藤・金崎1999；田尻・無藤2005）。これは、保育所が園外での自然とかかわ

る活動を意識して取りいれているというより、幼稚園よりも保育所の方が保育時間が長いために散歩などの園外活動を導入する機会が多いためであろう。しかし、その内容をみると“〈10〉園外の自然に囲まれたところで、鬼ごっこなどの身体を動かす伝承遊びをする”や“〈12〉園外の自然に囲まれたところで、滑り台やアスレチックなどの固定遊具を使って遊ぶ”、“〈18〉園外の自然に囲まれたところで、一定範囲内を自由に歩いたり、見たり、好きなことをしてゆったりと遊ぶ”が高頻度であったことから、自然とかかわることを意図して自然地に出かけたというより、遊び場として自然地を利用していると読め、散歩のように園外に出る頻度が高い結果をもって自然とかかわる活動が多いと判断することはできない。また、田尻・無藤（2005）は、園庭での活動は保育所より幼稚園の方が実施頻度が高いと報告したが、本研究では一部の項目に相互作用として現れただけで、それよりは公立・私立の差の方が目立った。田尻・無藤（2005）は、公立・私立の区別をせずに分析しており、上記の違いは質問項目や分析手法の違いによると考えられる。

公立・私立の差があったのは23項目中7項目で、うち6項目で公立の方が私立よりも高頻度で活動していた。内容では、“〈3〉保育室で、自然のもの（動植物や石・砂などの自然物）を室外から持ち帰って、利用して遊ぶ”や“〈4〉園庭の自然のもの（動植物や石・砂などの自然物）を使って、その場で遊ぶ”、“〈5〉園内で飼育栽培している動植物の世話をしたり、観察する”、“〈8〉園内で栽培している野菜や木の実を食べたり、飼育動物のえさにする”などで、園内の活動を中心に自然とのかかわりを意図的に行うような項目が目立った。園ごとの教育理念が先行する私立に比較すると、公立は幼稚園教育要領や保育所保育指針等のガイドラインに沿った保育を実践する傾向が強いと考えられ、現行のガイドラインで自然とのか

かわりが重視されている結果かもしれない。

次に、前幼稚園教育要領下の1997年に兵庫県の公私の幼稚園・保育所を対象として実施した井上（2001）の結果のうち、類似の9質問項目について（表4）、本調査の兵庫県の結果と比較した（図1）。調査対象者の抽出法や回答選択肢が異なるため増減についての比較判断はできないが、どの項目が相対的に変化したかを読み取ることは可能であろう。〈2〉〈3〉〈4〉〈5〉の4項目は、ほかの5項目に比べて本調査の実施頻度の方が相対的に高く、特に園庭での活動〈4〉〈5〉が1997年度の結果と比べて高い。これらの活動は従来も実施されてきた伝統的な保育内容ではあるが、より高頻度でなされるようになってきているといえる。また、その他の項目の実施傾向は1997年度と類似のパターンであったが、“〈8〉園内で栽培している野菜や木の実を食べたり、飼育動物のえさにする”だけが、本調査においてやや高くなっている。

以上、保育現場の自然体験活動の実施実態をまとめると、(1) 従来保育の中で取りいれられてきたような自然物を使っての遊び・飼育栽培などは、園内の活動を中心によく実践されている、(2) 都県・幼保・公私により実施内容とその頻度に違いがある、(3) 食農体験や自然と生活を結びつける活動などの実施頻度は低い、(4) 前教育要領下で実施した調査と比較すると、園庭での自然とかかわる活動が相対的に増えたようである。現代の子どもの自然体験不足を補う役割が保育現場に求められているが、今回の調査結果は保育現場がそれに応じた保育を実践していることを示している。特に、園での活動においては、公立幼稚園が多く項目で高い実施頻度を示し、子どもの実態に対応した教育的配慮がなされていると評価できる。しかし、地域・幼保・公私などによって実施頻度に違いがあり、活動内容もより豊かなものを意図的に導入できる余地があるといえ、これら

表4 質問項目の対応

2003年度調査の質問文	1997年度調査の質問文
<2> 保育室で、自然を主題にしたお話を聞いたり、絵本を見たり、読んだりする。	自然を主題にした絵本を見たり、読んだりする。
<3> 保育室で、自然のもの（動植物や石・砂などの自然物）を室外から持ち帰って、利用して遊ぶ。	植物や石など自然物を使って遊ぶ。
<4> 園庭の自然のもの（動植物や石・砂などの自然物）を使って、その場で遊ぶ。	植物や石など自然物を使って遊ぶ。
<5> 園内で飼育栽培している動植物の世話をしたり、観察する。	野菜や花など植物の栽培をしたりウサギや小鳥などの飼育動物の世話をする。
<6> ドングリなど野外の植物の実を持ち帰り、栽培する。	ドングリや雑草など野生の植物の種をとってきて栽培する。
<7> オタマジャクシなど野外でとってきた小動物を持ち帰り、飼育する。	オタマジャクシやザリガニ、昆虫など野外でとってきた小動物を飼育する。
<8> 園内で栽培している野菜や木の実を食べたり、飼育動物のえさにする。	自分たちで作った野菜などを食べたり、飼育動物の餌にする。
<9> 園内で生ゴミや落ち葉、雑草などを利用して堆肥や腐葉土をつくり、栽培に利用する。	園内の生ゴミや落ち葉、雑草などを利用して堆肥や腐葉土を作り栽培に利用する。
<18> 園外の自然に囲まれたところで、一定範囲を自由に歩いたり、見たり、好きなことをしてゆったりと遊ぶ。	自然とふれあえるところで、活動する内容を決めないでゆったりと時間を過ごす。

※回答は7段階

※回答は5段階

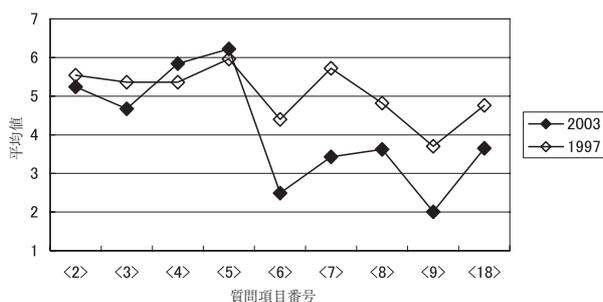


図1 1997年度調査と本調査の平均値の比較
 ※1997年度の平均値は1-5の範囲内であったため2003年度の平均値の範囲(1-7)に適合するよう、7/5倍して補正した数値である。

の点を解消していくことが今後の課題であろう。

本調査の別の質問項目群である園庭の自然環境の実態分析結果からは、園庭の自然要素を豊かにするためには、既存の設置環境にかかわらず保育者の意図的な努力が重要であることが示唆されている(井上・無藤2006)。地域・幼保・公私などの既存の設置条件の違いが影響力を持つのは確かであるが、保育者の意図も重要であり、カテゴリー間の違いの解消には、ガイドラインの改善やその趣旨の普及啓発だけではなく保育者の意識改革が大きな役割を果たすと考えられる。保育者に向けては、自然と生活を互いに入り込ませる実践の

先進的事例を知らせるような情報提供や研修の実施などが効果的であろう。また、子どもの実態に即して従来にない機能が保育に求められるようになっており、具体的な自然体験の機会提供もその一つであるが、それを検証しようとしている研究は数少ない。本調査では保育の実態がそうした求めに応じて変化している可能性が示唆されたが、今後も継続的な実態把握が必要であろう。

注

- 1) 林野庁 都道府県別森林率 (<http://www.rinya.maff.go.jp/toukei/genkyou/shinrin-jinkou.htm>, accessed on August 29, 2007)
- 2) 農林水産省 都道府県庁の姿—兵庫県— (<http://www.toukei.maff.go.jp/shityoson/map/2/28/agriculture.html>, accessed on August 29, 2007)
- 3) 農林水産省 都道府県庁の姿—東京都— (<http://www.toukei.maff.go.jp/shityoson/map/2/13-01/agriculture.html>, accessed on August 29, 2007)

参考文献

遠藤康子・金崎美美子 1999 幼児期における環境教育—自然遊びを生み出す幼稚園・保育所の自然環境の実態— 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 22, 223-231

- 井上美智子 2000 日本の公的な保育史における「自然とのかかわり」のとらえ方について—環境教育の視点から— 環境教育 9-2, 2-11
- 井上美智子 2001 幼稚園教諭の環境教育に対する認知度と実践の実態に関する調査研究 環境教育 11-2, 80-86
- 井上美智子 2006 環境教育の視点から自然との関わりをとらえ直す 日本保育学会第59回大会研究論文集 254-255
- 井上美智子・無藤 隆 2003 幼児期の自然とのかかわり：これからは 発達 96, 81-86
- 井上美智子・無藤 隆 2006 幼稚園・保育所の園庭の自然環境の実態 乳幼児教育学研究 15, 1-11
- 小谷幸司・美濃本梨恵子・柳井重人・丸田頼一 2000 幼稚園の園庭における園児の自然とのふれあいに関する研究 環境情報科学 29-2, 66-74
- 田尻由美子 1990 幼稚園、保育所における領域「環境」の保育指導について 精華女子短期大学紀要 17, 189-196
- 田尻由美子・無藤 隆 2005 幼稚園・保育所の自然環境と「自然に親しむ保育」における課題について—広域実態調査結果をもとに— 乳幼児教育学研究 14, 53-65
- 付) 本調査は、文部科学省科学研究費補助金(課題番号 15500601)により実施したものである。